臨床報告

白虎加人參湯が奏効した汎発性
湿疹の一症例

雨宮 修二

A Case Report on Generalized Eczema Successfully Treated
with Byakko-ka-ninjin-to

Shuji AMEMIYA

1) M. D., Second Department in Research Institute of Oriental Medicine, Kinki University, 377-2, Onohigashi, Osaka-Sayama-shi, Osaka 589, Japan

Abstract The author treated a 43-year-old woman suffering from generalized eczema with Kampo medicine. During the two months prior to coming to the author's hospital, the patient had been given topical corticosteroids for eruptions with itching in the lower extremities by a local dermatologist. The topical corticosteroids improved her skin lesions, but the effect was temporary. When she stopped using these topical corticosteroids, the eruptions not only recurred, but were larger than before. When she visited this hospital for the first time, exudative erythema and macules were seen over the upper and lower limbs and trunk. The author prescribed Byakko-ka-ninjin-to for her skin lesions. Within two weeks, her erythema and itching had improved, and within four months, her eczema had almost entirely disappeared. One year and seven months later, administration of Kampo was stopped, and there has been no recurrence since she first came for treatment (two years and five months).

Key words: eczema, Byakko-ka-ninjin-to

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 46, 567-571, 1996
(accepted 21 Aug, 1995)

緒言

一般に、皮膚の病気は局所の障害ではあるが、生体全体のなんらかの異常を反映している場合がある。そういう場合、局所の治療だけでは不十分で、生体全体に働きかける治療方が必要となる。漢方治療の特色のひとつはその「全体治療」という側面にあり、皮膚科疾患はその良い適応になる

と思われる。

湿疹は皮膚科外来の約 1/3 を占めるありふれた疾患だが、その本態や発症機序は明らかでなく、治療に難渋する場合もすくなくない¹⁾。ステロイド剤に反応するが、止めると再発する汎発性湿疹の患者に白虎加人參湯を用いて、良い結果が得られたので報告する。

1) 医, 近畿大学東洋医学研究所第二研究部門, 大阪, 〒589 大阪狭山市大野東377-2
[1995年8月21日受理]

1 腹部

2 腰部

図1 初診時

1 腹部

2 腰部

図2 1カ月2週間後

1 腹部

2 腰部

図3 1年5カ月後

3 右上肢

4 左大腿部

5 左下腿部

3 右上肢

4 左大腿部

5 左下腿部

3 右上肢

4 左大腿部

5 左下腿部

症 例

患 者：43歳，女性，身長160.0cm，体重53.5 kg

主 訴：腕，大腿，下腿および体幹部の湿疹

現病歴：平成5年1月中旬，痒みを伴う皮疹が出現し，皮膚科から副腎皮質ステロイド外用薬を処方された。ステロイド剤を塗ると皮疹は軽快するが，止めるとすぐに再発するため，ステロイドは中止し，温灸器，スクワレン油塗布などで様子を見ていた。しかし，皮疹は徐々に増悪し，強い痒みと滲出液を伴うようになったため，3月下旬当院を受診した。

既往歴：特記すべきことなし。

家族歴：特記すべきことなし。

現 症：来院時，皮疹は両上下肢，腹部および腰部に拡がっていた。局所は苔癬化した紅斑局面を形成し，周囲には島状および点状の要素が見られ，鱗屑と掻爬痕を伴っていた。また，一部には滲出液がみられた（図1）。写真は腹部，腰部，右上肢，左大腿部および左下腿部だけ呈示しているが，左上肢，右下肢も程度の差はあるが同様な所見であった。検査所見では好酸球が14.0%に増加しているほかは，IgEも125と正常範囲で，炎症所見もなかった。以上の皮膚所見と経過から当院皮膚科では汎発性湿疹と診断された。

漢方的所見は以下の通りであった。口渴（＋）めまい（＋）立眩（＋）冷え（＋）。脈：やや浮，中，力あり，舌：湿，無苔，腹診：腹力，中等度，悸動（＋）その他の所見なし。

臨床経過：比較的実症であり。口渴があることから白虎加人参湯（ただし人参4.0g，石膏48.0g）と紫雲膏を処方した。2週間後には痒みと赤みがやや軽減，1.5ヵ月後には明らかに皮疹が消退し（図2），当初14%あった好酸球も2%に減少した。約2.5ヵ月後には一番ひどかった左大腿部と下腿部も軽度の掻痒感と色素沈着を残すのみとなった。その後は，皮疹はほぼ消退しているが，まだ痒みがすこしあったのと，時々点状の発疹が出現するため，服薬は続けていた（平成6年1月からは1/2量）。約1年5ヵ月後の所見は図3のとおり

表1 白虎加人参湯加減方の使用生薬，用量，産地および購入先

生薬名	用量 (1日量)	産 地	購入先
石膏	48.0g	中国	ウチダ
知母	6.0g	中国	トチモト
甘草	2.0g	中国（西北）	ウチダ
粳米	9.0g	日本	トチモト
人参	4.0g	日本（長野）	ホリエ

（トチモト：栃木天海堂，ウチダ：ウチダ和漢薬，ホリエ：ホリエ生薬）

りほぼ完治したおり，その2ヵ月後に廃業した。現時点（平成7年6月）で初診から約2年5ヵ月を経過しているが，再発していない。

なお，使用した方剤の構成生薬の用量，産地，購入先を表1に示した。

考 察

湿疹の漢方治療報告は昔から数多く存在する。概観すると，いわゆる古方は比較的少数で²⁾³⁾，後世方が多く使われてきたようである⁴⁾⁵⁾。この症例について学会発表した時，なぜ消風散を使わなかったのかという質問があった。生薬構成を見ると消風散と白虎加人参湯とは知母と石膏が共通で，いくらか似通った所があり，消風散でも良かった可能性はあると思う。しかし，両者の薬味数を比較すると，消風散は13味なのに対し白虎加人参湯はわずか5味である。しかも消風散にはアレルギーになりやすい動物生薬も入っており，いろいろな物質にアレルギーを持つ患者にとっては，単純な生薬構成の白虎加人参湯のほうがより安全な薬方だと言えると思う。白虎加人参湯は石膏，知母，甘草，粳米，人参の五味からなる薬方で，『類聚方広義』では「大渴引飲，煩躁し，心下痞硬する者を治す」とその使用目標を定めている⁶⁾。本例では，大渴引飲というほどではないものの口渴があり，それは服薬とともに消失していった。煩躁や心下痞硬といった症状はまったくなかった。一般に，アトピー性皮膚炎においては口渴

が著明で、大雑把な言い方をすれば、皮膚だけでなく体に熱があって乾いた印象を受けることがしばしばである。そういう時に白虎加人参湯が非常に良く奏効する⁷⁾。湿疹においても比較的実証で、口渴など水分の欠乏が伺われる症状がある時には、白虎加人参湯が使えることを、本例は示していると思われる。

湿疹に対し白虎加人参湯を使うことはすでにいくつかの文献に記載されている^{8)~10)}。しかしその症例報告は極めて少なく、筆者が調べた範囲では、わずかに大塚が、顔面を主とする湿疹に対し、清上防風湯、十味敗毒湯、当帰飲子、温清飲いずれもが無効で白虎加人参湯で初めて治った症例について報告しているのみである¹¹⁾。本例は幸い客観的データとともに治療経過が記録できたので、御参考のためここに報告した。

総 括

ステロイド外用剤で軽減するが止めるとすぐ再発する、汎発性湿疹の患者に漢方治療を行い、治癒せしめた症例を経験したので、若干の考察を加

えて報告した。

本論分の要旨は、平成5年10月24日、日本東洋医学会関西支部例会（神戸）において発表した。

文 献

- 1) 佐藤良夫, 池田重雄: 標準皮膚科学, p.73, 医学書院, 1987
- 2) 和田正系: 漢方の臨床, **10**, 437-439, 1963
- 3) 遠田裕政, 岡本洋明, 森山健三, 渋谷知宣, 雨宮修二: 日本東洋医学雑誌, **37**, 289-295, 1987
- 4) 大塚敬節: 漢方と漢薬, **10**, 46-48, 1943
- 5) 矢数道明: 漢方の臨床, **16**, 206-208, 1969
- 6) 吉益東洞, 尾台榕堂, 西山英雄: 類聚方広義重校薬徴, pp.88-89, 創元社, 1986
- 7) 遠田裕政, 岡本洋明, 森山健三, 渋谷知宣, 雨宮修二: 日本東洋医学雑誌, **39**, 23-28, 1988
- 8) 大塚敬節: 漢方と漢薬, **1**, 33, 1934
- 9) 矢数道明: 漢方処方解説, pp.518-522, 創元社, 1985
- 10) 藤平 健, 小倉重成: 漢方概論, pp.363-364, 1982
- 11) 大塚敬節: 漢方の臨床, **14**, 51, 1967

要旨 43歳の主婦の汎発性湿疹に漢方治療を行った。患者は来院約2カ月前より痒みを伴う皮疹が下肢に出現し、近くの皮膚科から副腎皮質ステロイド軟膏を処方された。同剤を使用すると皮疹は軽快するが、中止すると再発し、皮疹は全身に拡がっていった。当院初診時には上肢、下肢、体幹部に苔癬化した紅斑と点状あるいは島状の発疹があり、一部からは滲出液が漏れ出していた。白虎加人参湯の加減方を投与し、2週間後には発赤と痒みが軽減したため、同方を継続し、4カ月後にはほぼ完全した。1年7カ月後廃薬したが、初診から約2年5カ月経過した現在も再発していない。

キーワード: 湿疹, 白虎加人参湯